

自分や他者を「認める」指導で 生徒や学級集団の力を引き出す

茨城県 日立市立多賀中学校

1年生段階で、生徒が自己有用感を持つことが、3年間の出発点になるといえる。日立市立多賀中学校の教育方針だ。そのような指導によって生徒は自信を持って自律した学校生活を送れるようになり、生徒同士が互いに高め合う集団が形成されやすくなると考えている。

●課題

3年間の指導のステップは 認める・磨く・高め合う

日立市立多賀中学校は、日立市の中央部に位置する住宅街にある中規模校だ。教育に熱心な保護者が多いこともあり、生活指導面における課題は少なく、1年生の時から落ち着いて学習に取り組み、県の学力テストでは平均よりも高いレベルにある。

一方で、最近気になる傾向として「たくましさ」に欠けることが挙げられると、1学年主任の鬼澤篤子先生は話す。

「つまずいたり、困難に直面したりした時に、立ち向かう気持ちを感じます。新しいことに挑戦するたくましさや身に付けることが、本校の教育活動のねらいの1つです」

学びに向かう原動力となるのは、将来に対する明るい展望だ。そこで、生徒が夢や希望を持ち続けられるような指導も大切にする。

また、生徒は主に3つの小学校から入学するが、人間関係をうまく構築できない生徒が年々増えている。生徒同士の交流の場を多く設けると共に、一人ひとりのコミュニケーション能力を高めることも重視している。このような力や姿勢を育てるために、同校

が心掛けていることは、1年生は「認める」、2年生は「磨く」、3年生は「高め合う」という指導のステップだ。

1年生の段階では、自分自身、そして友人の良さを認めることで、一人ひとりが居場所を見付けられる集団の育成に努めている。生徒同士が認め合うことから生まれる良好な関係を土台として、2年生ではそれぞれが磨き合う場を意識して設けている。そして、3年生では、教師の助けがなくても、生徒同士が自主的に高め合える関係の構築を目指す。鈴木修市校長は次のように語る。

「3年間の目標を達成するための基礎とな

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「一人一人の『生きる』のために、一人一人の人間性の伸長のために」を教育理念とし、生徒の可能性を最大限に引き出す教育活動を展開。2010年度「優良PTA文部科学大臣表彰」受賞。



校長◎鈴木修市先生

生徒数◎512人 学級数◎16学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒316-0036 茨城県日立市鮎川町 3-11-2

TEL◎0294-36-0533

URL◎<http://www.taga-j.hitachi-kyoiku.ed.jp/>

公開研究会◎未定

中学1年生の良さを伸ばす

るのが、1年生段階での育ちです。中学校は教科担任制になるなど、小学校と比べて教師との結び付きが弱まりますから、自分に自信を持って自律した学校生活を送れるように導いていくようにしています」

●活動の工夫と成果①

1学年の4分の1が 学年生徒会の役員を経験

自分や他者を「認める」ことを促す1年生の指導を具体的にみていこう。

生徒の自己有用感を高めることに結び付いている取り組みが、学年生徒会だ。学年生徒会の役員は、前・後期のそれぞれ、全5学級から4人ずつ、計40人が選出される。1学年約160人のため、4分の1が役員を経験することになる。

生徒の主体性を重視し、議題の多くは役員の発案によるものだ。例えば、「最近、服装が乱れている生徒がいる」という声が役員から上がり、学年集会で注意を促すことになった。その時、単に壇上から話すだけでは伝わりにくいと考え、役員がわざと乱れた服装をしてファッションショーのように登場し、どこを直すべきかをクイズ形式で問うことにした。役員が企画・運営したこの集会は大いに盛り上がり、服装への意識を喚起する効果が見られたという。

「初めは『自分に務まるだろうか』と不安

を抱く役員もいますが、アイデアを出し合ったり、集会を運営したり、前面に出て活動するうちに次第に自信を深めていく姿が見られます」（鬼澤先生）

集団の力をより引き出すためにリーダーを育てることも、学年生徒会の役割だ。そこで、1回目の学年生徒会では、「どのようなリーダーになれば、皆が協力してくれるだろうか」と、役員全員で目指すリーダー像を話し合う。「自分たちが率先して生活を正す」「皆のことをよく考える」といった結論が導かれることが多いという。

ただ、生徒に役職を任せるだけで、リーダーシップが身に付くわけではない。学年生徒会担当の大谷智恵美先生はこう強調する。

「話し合いの進め方など、自分たちの思いを実現するための『型』を教えることが1年生では大事です。型が身に付けば、そこから発展して応用できるようになります。また、リーダー同士が仲良くなるよう促すことも大切にしています。そうすれば、自分の学級の課題などを互いに相談して、アドバイスできるようになるからです」

前期の役員は小学校でリーダー的な存在だった生徒が多いが、その活動を見て、「楽しそう」「自分もやってみたい」と、後期は比較のおとなしい生徒が立候補するケースもよく見られる。「自分はリーダーとして前に出るタイプではないが、リーダーの補佐役を



日立市立多賀中学校校長 鈴木修市 すずき・しゅういち
「子どもを宝物として大切にしている人たちが、生徒の後ろにはたくさん存在することを常に心掛ける」



日立市立多賀中学校 おにざわ・あつこ
鬼澤篤子
1学年主任。英語科。「1生、勉強。1生、青春。自分を、そして今を大事にして自己実現をしてほしい」



日立市立多賀中学校 おおたに・ちえみ
大谷智恵美
学年生徒会担当。1学年担任。「家族と同じような気持ちを持って、生徒一人ひとりを大切に」



写真 学年生徒会の様子。自主性を大切にした運営により、1年生のリーダーシップを育てるきっかけとなっている学年生徒会。この活動を機に、中学生としての意識が大きく育つ生徒も少なくない

務めてみたい」と、挑戦する生徒もいる。

「サブリーダー的な生徒にとっても、学年生徒会は成長への大きなきっかけになります」（鈴木校長）

リーダーシップだけではなく、その他の生徒のフォローシップを育てることも留意している。リーダーとフォロワーの良好な関係が集団としての力につながるからだ。

「投票の時に『皆で決めるのだから、きちんと協力しよう』と指導し、選んだ側にも責任を持たせるようにしています。日頃から、役員は皆のために一生懸命に考えたり、陰でさまざまな仕事をしていることも伝えていきます」(大谷先生)

役員に協力的な態度が生徒の間に育っていることが、「自分も役員をやってみよう」と考える生徒の増加にもつながっていると分析している。

●活動の工夫と成果②

学年通信に全員の声を掲載 生徒の活躍を保護者と共有

次に、1年生の1学期に実施する「心ゆたかな体験活動」に注目したい。

この活動は市内の全公立中学校が行うものだが、宿泊地や活動内容は各校に任されている。同校は、人間関係づくりに加え、一人ひとりの自己有用感の向上やたくましさの育成に重点を置いている。

宿泊地は、電気の通っていないキャンプ場だ。そこに半日掛けて歩いて行き、テント設営や食事の用意などを全て生徒の手に委ねることで、困難な場面にも挑戦する気持ちの萌

芽を促している。

キャンプ場で行う活動は、学年生徒会役員、および「食事づくり」「グループ活動」など5つの実行委員会のメンバーの計50人を中心に進める。他の生徒も何らかの係を担い、全員に役割を持たせる。

「生徒主体の運営のため、自分たちでアイデアを出して実行する必要があることを実感します。それにより、一人ひとりに『自分か動かないと物事が進まない』という意識が芽生えます。活動後は、自信を持って主体的に発言したり動いたりする姿が見られるようになります」(大谷先生)

こうした生徒の頑張りを認め、保護者と共有するために、学年通信「かしわ」を月2回発行する(図)。学校行事や学習内容を伝え、学年生徒会役員、学校行事の実行委員会メンバーなどの声を掲載する。

「生徒に原稿を依頼するなどして、1年間で全ての生徒の声を載せるようにしています。自分の役割の大きさを認識してもらい、これからの学校生活への意欲を高めてほしいという願いがあります。保護者から褒められ、家庭でも認められることで自信にもつながります」(鬼澤先生)

保護者の評価は高く、「全てファイリングして保存している」といった声も聞かれるという。また、学校のブログも毎日更新し、保護者とリアルタイムに情報を共有している。

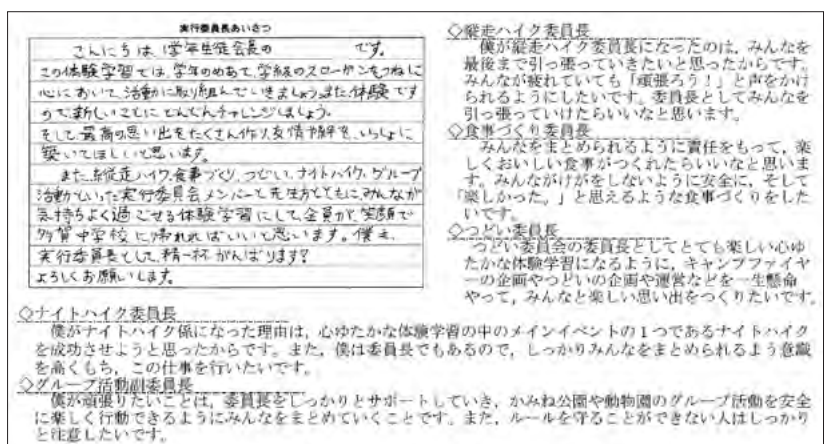
●活動の工夫と成果③

話し合いの習慣化により 学級の「自治」が促される

3年間の指導の目標は、「主体的に高め合う生徒の育成」だ。そのスタートである1年生から、日々の指導の中に話し合う活動を取り入れている。

1年生の最初は、「先生、どうしたらいいですか」などと教師に判断を仰ごうとする傾

1 学年通信「かしわ」(抜粋)



学年通信には、生徒の声を出来るだけ多く載せるようにしている

*同校の資料の一部を掲載

中学1年生の良さを伸ばす

向が強い。そのような時は、教師が間に入りながら、生徒同士の話し合いで解決できるように促す。ただ、人間関係が出来ていない段階では、みんなの前で意見を言うのは難しい。そこで、発言に対して、教師が「今の考えについてどう思う？」などと質問し、一人ひとりに発言させて話し合いをつくり上げていく。話し合いは、学活や休み時間、帰りの会など、課題が持ち上がった時に行く。

「自分たちの話し合いを通じて課題を解決していくという経験を積み重ねることで、次第に話し合いが普通となり、『先生、こんな話し合いをしたのですが、一緒にいてくれませんか』といった提案を受けるようになります」（大谷先生）

11月のある日、大谷先生は「学校に持ち込めるはずのないヨーグルトのふたが落ちていたので話し合いたい」と、生徒に持ち掛けられた。生徒には、犯人探しではなく、きれいな教室を維持するためのルールを考えたいという思いがあった。

「問題自体は小さなことかもしれませんが、自分たちで話し合って解決したいという思いが生まれた点に1学期からの成長を感じ、とてもうれしく思いました」（大谷先生）

話し合いの結果、教室を清潔に保つための方法を各自が考えることになり、持ち寄られたアイデアを基に、学級で守るべきルールが決められていった。生徒の気持ちが学級の「自

治」に向かっていることがよく分かる例だ。

●活動の工夫と成果④

「些事を大切に 他者を思いやる感性を育成

決して目立つ取り組みではないが、「些事」を大切にする指導も重視している。些事とは、教室に落ちていくゴミに気付いて拾ったり、靴箱に靴を揃えて置いたりすることだ。なぜ、そのような点に着目しているのか。

「人の気持ちを思いやる豊かな感性は、こまやかな気遣いがなければ育たないからです。そこで教師は、ささいな場面でも当たり前のことをしっかりと出来ている生徒を褒めるようにしています」（鬼澤先生）

学校のルールとは別に、日常の細かなことについて、自分たちでルール化する指導も取り入れている。例えば、給食のおかわりの仕方ルールにした学級もある。ルールの内容より、1年生の時期から「皆で決めたルールは皆で守ろう」という気持ちを育てることが重要だという。

「『自分は関係ない』という気持ちの生徒がいると問題や荒れが発生しやすくなります。例えば、学年の行事で動く生徒と動かない生徒が分かれている場合などは、1人の責任放棄が全体に影響しますので注意して指導しなくてはなりません」（鈴木校長）

今後、取り入れたいと考えているのが小学

校と連携した指導だ。例えば、自分が卒業した小学校でボランティアをしたり、小学校の先生に手紙を書いたりする活動を検討中だ。「小学校の先生に成長を改めて認めてもらったり、小学生だった頃の自分を見つめ直したりすることで、『中学校でどのような力が付いたか』『2年生になったら何を頑張りたいか』といった考えが生まれるきっかけになると思っています」（鈴木校長）

そのように、生徒の内面に十分に働き掛けることによって、一人ひとりの力を引き出したいと考えている。

鈴木校長が考える1年生に大切な指導

中学生は大人になるための大切なステップです。一人ひとりの成長のスピードは異なり、中には時間の掛かるケースもありますが、それぞれの状況を見取って適度な壁や段差を準備することを1年生の指導として重視しています。そのためには、学級や学年にまとまりがあって安定していることが重要です。校長として、適材適所の教員配置を心掛けるなど環境を整え、指導体制がうまく機能するようにしています。また、私自身が授業や部活動をよく観察し、生徒の状況を把握することにも努めています。